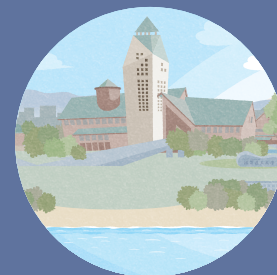
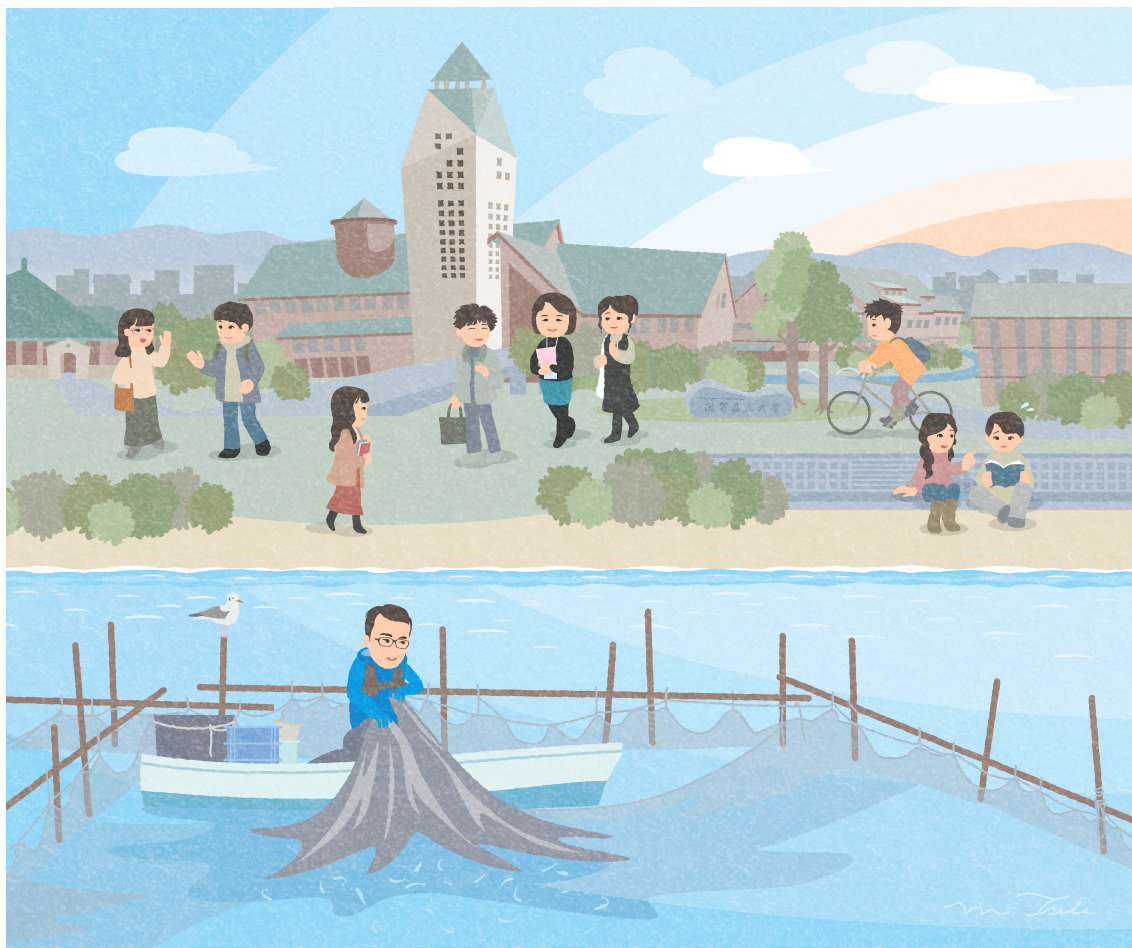


S H I G A U S P S T A R S

県大の星

2025
11



地思人

—— 卒業生の今 ——

フィッシャーアーキテクト代表
志賀町漁業協同組合

駒井 健也

Komai Tatsuya

公立大学法人滋賀県立大学
事務局職員

高谷 美穂

Takatani Miho

U S P
S T A R S
11
2025



滋賀県立大学

滋賀県立大学 OBOG Magazine
県大の星 第11号

発行月 | 2025年2月
発行 | 滋賀県立大学 経営企画課
〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500
Tel.0749-28-8200 Fax.0749-28-8470

漁師の立場から伝えていきたい

在学中に感じた琵琶湖の魅力を

CASE

01

地思人



フィッシャーアーキテクト代表・志賀町漁業協同組合

駒井 健也 こまい・たつや

[環境科学部 環境建築デザイン学科 2014年度卒業 大学院環境科学研究科環境計画学専攻 環境意匠研究部門 2016年度修了]

卒業後、琵琶湖の漁師を目指し、国の制度を利用して3年間の研修を受けて独立。現在は、フィッシャーアーキテクト代表を務める。志賀町漁業協同組合に在籍し、漁師に従事しながら琵琶湖の暮らしを発信している。

キャンパスは琵琶湖。
テキストは人間。

このモットーを胸に
社会で活躍する卒業生の原点に迫るインタビュー

誰かのために
思いを寄せて、進む原動力

今回、“県大の星”としてご紹介するのは、
琵琶湖の漁師であり、フィッシャーアーキテクト代表の駒井健也さんと
滋賀県立大学職員の高谷美穂さんです。

学生時代に学んだことも、在学中に経験したことも、
そして、卒業後の進路も全く異なるおふたり。
ですが、誰かのためや社会のためになる仕事を選び、
一途に突き進んでいるという共通点が。
そんなおふたりに大学時代を振り返っていただきながら、
現在の仕事のことやこれからの展望をうかがいました。

県大の星
SHIGA
USP STARS

2025

11

地思人

卒業生の今

ハングリー精神を持つて 大学の環境をフル活用

高校が進学校だったこともあり、周りは京都大学とか、東京大学とかに進学するよな人たちがばかり。自分はというと、学年の中で平均よりは上位だけれど、トップではないし…。そんな劣等感を抱いていました。滋賀県立大学も第一志望ではなく、正直なところ偏差値を基準に選んだ部分があります。

当時の県大は伸び伸びと好きなことができ環境があり、ここでハングリー精神を持って全国や世界を視野に入れて活躍できるようにになりたいという思いがありました。高校時代は、理系クラスでしたが、工学や実験があまり好きではなく、クリエイティブな発想でモノづくりに携われる理系の学科がいいなぁと考え、環境建築デザイン学科を選びました。

「ひたすら建築」に没頭

学部生時代は、ひたすら建築に集中していました。良い建築物を作るためには、たくさんさんの教養が必要だと考え、授業はきちんと出席し、GPAもトップを目指して勉強していました。おすすめの本を各分野の先生に聞いて読み漁り、ディスカッションする日々。授業の合間には、図書館に入り浸っていましたね。とにかく建築は勉強し

ないといけない幅が広く、学ぶこととても食欲であったと思います。

また、設計演習では、誰よりも時間をかけて取り組み、製図室にこもりつきりで熱量のある建築物の提案をし続けました。学年で数人だけ選ばれて講評頂ける、合同講評会で発表したこともあります。全国のコンペに当選するために、作っては壊しを繰り返す毎日でした。

建築をするなら 世界を見るべきだ

松岡拓公雄教授に「建築をするなら、世界のいろんなものを見た方がいい」と言われ、大学時代は国内から海外、いろんなところへ旅をしました。1年生の時は国内を中心に、2年生はアジア、3年生はヨーロッパへ。4万円しか持たずに飛び立つ、



お金をかけない貧乏旅行だから、野宿しながら自転車やヒッチハイクで回っていましたね。当時、訪れたヴェネチアがとても印象的で水辺やその周辺で暮らすことを考えるきっかけになりました。また、外から見ることでも滋賀の魅力が再発見できたことも大きな収穫です。先生の言葉が示す通り、世界を見て良かったと思える、今の私の基礎を作った重要な出来事の一つです。

建築の枠を超えて考えた 水と共にある暮らし

環境建築の設計の分野では新進気鋭の声澤竜一先生が、滋賀県立大学に新任されるということでゼミの第一期生としてお世話になりました。ゼミでは、滋賀県以外の地域において、土壁を用いた今までのない住宅の設計を行うなど、地域性に焦点をあて、ヴァナキュラー^{※1}な建築や暮らしを研究していました。また、先生が立ち上げたプロジェクトにも参加し、沖島の漁村の調査、湖畔のホテル設計、湖畔のエコトーンを再生させるための外来種の駆除など、多くの活動に参加しました。ゼミでの研究や沖島でのプロジェクトを深めるほど「琵琶湖の暮らしって、すごいいな」と思いつつも、外側の立場でできることの限界も感じていました。

※1 気候やその土地の風土など、地域に根差して造られた建築のこと



当時の沖島の漁師さんたちは「漁師は儲からないから息子には継がせられない。ほぼ全員が島外に出て仕事をしている」「子どもたちに継いでほしいと思えるような、収入を得ることは厳しい」ということを話してくれました。そのお話から漁業という産業が根本的に成り立たなくなっている状況を知りました。いくら空き家を改修したところで持続可能な地域になるのだから、産業として成り立つ仕組みがないとやっぱり地域は変えられないと痛感し、建築の視点を通して漁師の仕事を見てみたいと感じました。

加えて、海外で見た水辺の暮らしの素晴らしさ、改めて感じた滋賀の魅力が何か形にできないかとも考えました。琵琶湖に関わるたくさんの人に会い、琵琶湖の暮らしに触れ、湖魚を食べておいしさを知ったことが契機となり、漁師の仕事に興味を持ち

始めました。建築の仕事は誰かからの依頼があって仕事が成り立つものですが、自分自身が現場に毎日通いながら、自分たちの暮らしを作っていく漁師の暮らしがすごく素敵だと感じました。先生も「就職なんてせずやりたいようにやったらいい。漁師の世界に飛び込んだらどうだ」と背中を押してくださり、大学院の卒業後に漁師修業をスタートさせました。建築から漁師なんて、本当にゼロベースで、もう一度、大学へ行くような気分でした。

建築から漁師の道へ 難しさにも直面

全く漁師と縁のなかった私は、大学の友人



撮影：栗田理沙

たちが就活をするタイミングで、琵琶湖周辺の漁港をまわり、さまざまな漁師さんご厚意で漁の現場を10カ所ほど見学させていただきました。滋賀県の10日間の短期研修制度から始まり、その後、国の研修制度を利用しました。研修制度は短期、中期、長期とありましたが、えり漁^{※2}をやってみたかったこともあり、えり漁を専攻で成り立たせている漁師が最も多い湖西の地域で3年という長い研修期間を選びました。修業をさせてもらった親方が漁をやめるタイミングで引き継ぎ、ひとり立ちして今年で4年目です。えり漁を中心に、他の漁港の漁師さんに教わりながらヒワマスの刺し網漁、ウナギの竹筒漁と延縄漁を季節ごとに組み合わせながら行えるようになってきました。

しかし、学生の時に漁師さんから聞いた「売り上げが少ないから、親として子どもには継がせられない」という漁の現状を、今、身に染みて感じています。根本的には魚が獲れば解決しますが、年々、漁獲量も減っています。私も1年目、2年目にちゃんと水揚げ実績ができたなら、それを基に積み上げて、仕事を確立させる予定でした。私個人に限らず、琵琶湖全体で同じような状況ですから、漁師として生業を立てることがいかに厳しいかという事です。

※2 湖畔から沖合に向かい矢印型に網を張り、湖畔によってくる魚の習性をうまく利用して「つぼ」と呼ばれる部分に誘導し、漁獲する方法

教えて！ 駒井健也さん

リフレッシュ！
休日の過ごし方



休日はない!(笑)

漁に出る以外にも事務仕事やお客様のメール対応など、いろんな業務があります。今は丸一日休める休日はないですね。でも、仕事の後に疲れ果てて、琵琶湖が見える温泉に行ったり、おいしいごはんを食べに行ったりすることは、メリハリがあって幸せです。

人生を
豊かにする
趣味



おいしい食べ方を探求

滋賀県内外で淡水魚や海のおいしい魚を食べることを通じて、琵琶湖の魚のおいしい食べ方を探求することが趣味で、ライフワークになっています。農業や林業、琵琶湖に関係するフィールドに出向いたり、他府県の漁業体験をしたり、市場をめぐるたり。建築物を見に行く以外の目的が増えたことが、漁師になって自分自身が驚いているし、良かったことです。

CASE
02
地思人

恩師の研究室が居場所だった大学生活
職員の立場で学生の今とこれからを支えたい



公立大学法人滋賀県立大学 事務局職員
高谷 美穂 たかたに・みほ

[人間文化学部 地域文化学科 1999年度卒業 大学院人間文化学研究科 地域文化学専攻 2001年度修了]

卒業後、私立の女子大学に就職。入試課、学長室、新学部設置準備室等に配属。2007年滋賀県立大学に入職。教務課、総務課、地域連携・研究支援課等で業務に従事。学生の学びや教員の研究を多方面からサポートしている。

漁師をベースに
琵琶湖の暮らしを届ける事業も

このような状況を打開し、新たな琵琶湖の漁師像を目指すべく、漁業者としての仕事を軸にしながらも、「琵琶湖の中から淡水の暮らしを届けます」というコンセプトで活動をする「フィッシャーアーキテクト」を立ち上げました。そこで、建築や地域の課題を大学で学んだ私だからこそできる事業を多面的に広げていっています。その一つ、漁体験は最初は数人からのスタートでしたが、今では数十組の参加があり、リピートして来てくださる方も。高校生の修学旅行、留学生団体での予約も増えてきて、琵琶湖に出る事業の下支えとなっています。



また、琵琶湖の魚を食べてもらう仕組みとしてオンライン販売を始めたり、マルシェ出店したり、湖魚の試食イベントなどを開催しています。人間が暮らししていく中で食は切っても切り離せないもので、琵琶湖の食材に興味を持って、食べてもら

うきっかけにできたらと思っています。食べることを通じて、地域にこういう命があることを知ってほしいし、その気持ちで地元・琵琶湖を守りたいという気持ちに繋がれば嬉しいですね。

琵琶湖を表現して
魅力を伝えていく活動

私には建築というモノづくりの基礎があり、表現することやモノを作ることで琵琶湖の魅力を伝えたいという思いがあります。そんな中で偶然出会ったアーティストの方に漁体験をしてもいい、琵琶湖で感じたことを表現してもらおう「BIWA KO ARTISTS・イン・レジデンス」を始めました。ありがたいことに滋賀県の「マザーレイクゴールズ(MLGs)推進委員会」が窓口になってPRしてくださる取り組みとなり、継続しています。漁師一人では、琵琶湖の暮らしの魅力を伝えられる限界があるため、私の代わりに表現して伝えていける人が増えることは、すごく良いことだと思っています。

えり漁と建築を合体
滋賀県立大学と一緒に研究中

さまざまな漁に関する活動の中で、やっぱり自分の根幹にある建築を学んだことからこそできることは何かという問いを形に

すべく、漁師になってからも一級建築士の資格取得に向けて勉強することもありました。でも、何か大きな建物をつくる仕事は自分のやるべきことなのかと葛藤があったのも事実です。そんなとき、滋賀県立大学に西澤俊理先生が新任され、漁に来ていただきました。このご縁がきっかけで、えり

そのものや、えりのある琵琶湖の風景を成り立たせている漁師の身体、漁具や舟といった道具、魚という資源に加え、それらと持続的に共存するための知恵などを全て建築の要素と見立てて図解化する、新しい挑戦が始まりました。月に一度、研究室のみんなに漁の現場を体験してもらい、環境の時代にあるべき建築や空間の姿を琵琶湖の上に描くことで、「こんなふうな暮らしがしたい」と思ってくれる人を増やしたいと考えています。それが結果として漁師を増やし、漁村の風景を守り継いでいくことに繋がるのではと考えています。「キャンパスは琵琶湖。テキストは人間。」という滋賀県立大学のモットーに恥じないよう、琵琶湖の魅力を楽しく伝えていきたいと思っています。

好きな場所で好きなことを仕事に
苦勞は多いが、やり切る力を

私が建築だけでなく、さまざまなことを勉強してきたように、複数の分野を気軽に横断して学べるのが滋賀県立大学の大き



な魅力だと思っています。

大学とは、待っていて与えられる環境ではないですし、主体的に且つ能動的に動かねば何も得ることはできません。私は結果として、琵琶湖の漁師になり、今は琵琶湖の魅力を伝えるための活動にも力を入れています。琵琶湖は私が選んだ場所ですが、好きな場所で好きなことを仕事にしていることは、簡単なことではありません。できるまでやり続ける気持ち、自ら行動する力があるかどうかと思っています。

新しく何かを切り開きたい人は自分で考え、この大学でやりたいことに向かって動き続けてほしいと思います。それを「やっていいんだよ」と背中を押し、支えてくれるのが、滋賀県立大学であったと改めて実感しています。

開学2年目のフラットな雰囲気の魅力に魅かれ入学

もともと日本史と国語は好きだったので、正直なところ、滋賀県立大学は本命の志望大学ではなかったんです。ところが、後期入試で滋賀県立大学を受けたときの先生の雰囲気がとても良くて心が動き、人間文化学部地域文化学科への入学を決意しました。

開学2年目だった滋賀県立大学は、既成の『大学らしさ』や上下関係のない、いい意味でフラットなムード。学生も教員も「自分たちがこれから大学をつくっていくんだ！」という雰囲気があったように思います。



滋賀県立大学では1年次から学科専門科目を履修するのが大きな特徴です。入学式

のわずか2日後に彦根市の竹ヶ鼻遺跡に出かけ、5月には学科でモンゴルのゲル(移動式の住居)を組み立てて見学するなど、入学してすぐから専門分野を体で学べたのが印象的でした。

1年次後期の「地域文化基礎演習」では、数名で自由にテーマを決めて取り組むという課題がありました。私はグループ6人で「残っているもの、残すもの」をテーマに中山道の鳥居本から草津までを地域の方にインタビューをしながら、10回に分けて歩くことに挑戦。10月から12月の寒い時期に、歩いてから授業に出て、そのあとバイトに行ったりと、今思えば信じられないことをしていましたね。グループで課題を仕上げるにあたっては意見の違いから衝突することもありました。高校時代までわりと波風立って友人と付き合ってきた私にとって、人と真正面からぶつかることは初めてだったかもしれません。探めてケンカしたり泣いたりしても、疎遠になるのではなく、逆に仲が深まっていく、そんな経験が大学時代にできて本当に良かったと思っています。また、日本古代の交通遺跡の研究が専門で当時助教だった高橋美久二(よしくに)先生が中山道を一緒に歩いてくださることもありました。先生や仲間と、街道や歴史のこと、そしていろいろな雑談を交えながら歩いた旅はかけがえのない思い出です。そのときのメンバーとは今でも集まっているんですよ。



学んで、飲んで、語り合っ先生との繋がりがエネルギーに

このように、現地に行ったり、実物を触ったりという演習が多いので自然に学生と教員の距離が近くなりました。また、講義であっても少人数制なので、教員も一人一人の顔が覚えやすい。もちろん教員とそれほど接点のないまま卒業する学生もいたと思いますが、私は大学生活といえは、クラブより、バイトより、彼氏より、先生との思い出なんです。

実は大学で何をしていたかわからずモラトリアムに陥った時がありました。ゼミ選択の際も、漠然と「近現代史がやりたい」と高橋先生に相談したところ、「日本の近現代を学ぶなら、その頃の日本は朝鮮と



韓国の都市・木浦へ

大学院時代のエピソードを一つ。私の研究テーマは『植民地朝鮮における神社政策』。日本による皇民化政策の一つとして朝鮮半島でもかつては1000社ほど神社があり、参拝が行われていましたが、1945年に一斉に無くなったことに関する研究です。『創氏改名以外にもそんなことも行われていたなんて』と興味が湧き、渡韓して神社跡を回ったり、国会図書館で資料探しをしたりと、研究に取り組みました。

ところが修士論文の自身がほぼ固まっていた2年次の夏、『朝鮮半島に1つだけ神社が残っているらしい』という情報が。その真偽を自分で確かめないと論文は通さないと朝鮮古代史専門の田中俊明先生に言われ、急遽、韓国の都市・木浦(モッポ)へ。結局それは神社ではなく寺院であることを確かめ、無事論文を仕上げることができました。胃が痛くなるような思いをしましたが、今となると、自らの目や耳や足を使って調べることの大切さを教わったと感謝しています。

法人採用職員第1号として違う角度から大学と関わる

卒業の頃、ちょうど社会は就職氷河期時代。私もなかなか就職先が決まらなかったのですが、3月に私立の女子大学の職員として働くことが決まりました。配属された入試課では、高校訪問や入試イベントでの相談会開催などに特に学生募集に注力しました。そこで、大学の特徴や他大学との違いを意識するという考え方が身についたように思います。他大学の入試課職員と交流する機会も多く、「どうしたら学生に選ばれる大学になるか」など真剣に語り合う人たちから刺激を受け、大学職員であることの面白さを感じながら5年を過ごしました。

そんな時、お世話になった高橋先生が63歳という若さで逝去されました。何も返返しできないままのお別れとなり、とても悲しくて気落ちしました。少し落ち着いた頃、ふと、何か先生のこと載っていないかと滋賀県立大学のホームページを見たところ、偶然、職員募集の案内を見つけたのです。実はもともとこの大学は滋賀県の機関として、職員は全員公務員(県職員)だったのですが、2006年の法人化に伴い、大学独自で採用ができるようになったばかりのタイミング。『これは高橋先生に導かれたのかもしれない』と試験を受け、法人採用職員第1号のひとりとして合格。職員として古巣に戻ることにになりました。



地域連携・研究支援課

教えて! 高谷美穂さん

私は知っている
県大の秘密

リフレッシュ!
休日の過ごし方



県大TAKIBI TALK

月に1回、TAKIBI TALKを行っています。司会やテーマはありません。ただ焚き火を囲んで一緒に時間を共有し、ゆるくつながっています。



子どもと過ごす時間

仕事が休みの日は家族と過ごす大事な時間。本が大好きな息子と一緒によく図書館に行っています。

駒井健也さんの思い出



大学の駐輪場の設計に携わったこと

大学の駐輪場の建築コンペティションで選ばれて、実際に自分が設計したものが竣工したことです。今も学生のみなさんに大切に使用されており、とても感慨深いものがあります。全国規模のコンペティションにもたくさん参加し、多数のアワードを受賞しました。その中でも駐輪場の設計は忘れられない思い出です。



課題を提出し続ける日々

私が入った芦澤竜一先生のゼミは、新たな建築を模索するには最高の環境でしたが、とにかくスパルタ。毎日のように課題を出され、実務設計の習得や国内での設計コンペを研究室で提出し続ける日々でした。その結果、「大学が家」みたいな、そんな状態でしたね(笑)。



近江環人カリキュラムでの出会い

大学院では「近江環人」のカリキュラムを履修し、滋賀県内の社会人の方と繋がり、実際に古民家を改修し、コミュニティキッチンとしての活用を行いました。当時の出会いがご縁となり、今は卒業生の集いである「NPO法人環人ネット」と一緒に琵琶湖の漁から派生した漁体験や未利用食材を用いた料理教室イベントを企画しています。



最初に配属された教務課では、教職免許などの資格、カリキュラム、授業、履修・成績の管理など学業に関する業務を行いました。その4年後に総務課へ。こちらは大学における人事や労務管理、給与支給など教職員を事務的な面からサポートする部署です。2017年には地域連携・研究支援課に異動。産学官連携や研究支援、地域交流に関する業務などを行っています。本学には学生が主体となって地域の課題解決や活性化に取り組む『近江楽座』というプロジェクトがあります。私の場合、学生時代の学問分野が今の仕事に直接役に立っているわけではありませ

地域の現場に入り込むことで「場を創り出す力」が養われる

今こそ「環境」を冠する学部のある大学は増えましたが、本学は約30年前に環境科学部をつくった初の公立大学です。また、今や多くの大学がアピールポイントにしている「少人数」「地域密着」といったスタイルも開学当初から行われていました。さらに琵琶湖を有する豊かな自然や歴史、文化から学び探求する基本姿勢は、2015年に国連会議で採択されたSDGsにも通じるものがあります。サステナブルな社会の実現を30年前から目標としていたことがすごいと思うし、30年間の確かな積み重ねがここにはあると感じています。特に地域教育プログラムが充実してい

んが、自分にとって貴重な体験や出会いをもたらしてくれた「大学」という場が好きで、より良いものになりたいという思いがモチベーションになっているのかもしれない。現在本学の事務局には7つの部署があります。大学職員という点、学生と接する仕事というイメージがあるかもしれませんが、課によって学生と接する機会の大小や、関わる度合いが異なります。でも、先生が研究しやすい、また職員が働きやすい場所を作ること、ひいては学生にとってのいい大学づくりに繋がっているんだということも肝に銘じて仕事をしています。

で、地域とのつながりによって得られる学びや経験は魅力ですね。先述の近江楽座もその一つですが、学生が積極的に地域に入り込んでいくことで、年代や考え、価値観の違ういろんな人と接し、そんな中で少しずつコミュニケーション力やファシリテーション力が養われるのだと思います。人の話をよく聞いて、「場を創り出す」スキルは、社会人になってからきつと役立つはず。



滋賀県立大学を「推し」と思ってくれるファンを増やしたい！

この冊子のタイトルじゃないですけど(笑)、私は卒業生で、かつ初代法人職員ということで「県大の星」として『もっと大学をよくしたい』とあれこれ考えすぎて、プレッシャーから体調を崩してしまっただけがありました。その後、出産や育児、病気でこの休職という経験も経て、いま、家庭との両立や、体調面も考えながらほどよい力加減で働くことの大切さを学んでいるところです。

切な場所だと思ってくれる人を増やしたい。例えば、大学祭での子ども連れのイベントなど、自分のライフスタイルが変わっても気軽に訪れることのできる、戻ってこられることのできる場所でありたいですね。また会いたい人がいる場所であることも大切。そのためには学生と教員だけでなく、学生と職員、教員と職員それぞれの距離が近づくような大学づくりができればいいと思います。

この大学をいろんな立場から見えてきた私の今後の挑戦は、滋賀県立大学を「推し」と思ってくれるファンを増やすこと。滋賀県立大学は2025年度に創立30周年を迎えます。大学って卒業してしまうと戻ってこないことがほとんどじゃないですか。でも私がそうであるように滋賀県立大学が大

考えてみると、私は流されるように進路を決めたごく普通の大学生でした。このご時世、大学で起業する人や海外で活躍する人などが注目されたり輝いて見えたりするけれど、滋賀県立大学は普通の子が肩肘張らずに自分らしくいられる大学です。今やりたいことが見つからないという人も、その時々に出会った人やモノに対して、縁を感じ、楽しみながら真摯に向き合うことで、きっと得るものがあると思います。やれることはなんでも全部やってほしい！そんな時間と体力がある年代なんです。

Nemories Archive

県大時代の思い出アーカイブ

大学時代の思い出をお聞きました

高谷美穂さんの思い出



木浦への弾丸調査

「神社が残っているらしい」という情報をもとに、日本からソウル、ソウルからさらに5時間以上かけて木浦へ行きました。木浦はいわゆる日本統治時代の建築物が比較的残っている場所です。神社は残っていませんでしたが、参拝道となった階段は残っていました。(2001年当時)

高橋先生の研究室

空き時間があれば高橋先生の研究室にお邪魔していました。大学生活のこと、研究のこと、将来のこと、なんでも相談した人生の恩師です。研究室の窓からは、県大のシンボルのえんびつ塔が見えました。



湖岸道路

3年生頃から自動車通勤を始めました。琵琶湖を見ながら四季を感じることができる湖岸道路はドライブコースとしても最適です。今も毎日通っています。

